花暦封下文初編中之巻

東都　蘭月亭有人著

第三回

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

まぐれ　他の月とは
ちがひ　大臣　関白
少しとも　ちがひ　しかし　ふ　ちがひ　ぬ　ぬ　ぬ

あへて　おもてをそれわどまを　へめ　どんか　さん
しこ　ゝ　ゝ　ゝ

四月

四月十八日 雨天

四月廿八日 晴

四月廿九日 雨

四月晦日 晴

四月

四月廿日 晴

四月廿一日 晴

四月廿二日 晴

四月廿三日 晴

四月廿四日 晴

四月廿五日 晴

四月廿六日 晴

四月廿七日 晴

四月廿八日 晴

四月廿九日 晴

五月

五月朔日 晴

五月二日 晴

五月三日 晴

五月四日 晴

五月五日 晴

五月六日 晴

五月七日 晴

五月八日 晴

五月九日 晴

五月十日 晴

五月十一日 晴

五月十二日 晴

五月十三日 晴

五月十四日 晴

五月十五日 晴

五月十六日 晴

五月十七日 晴

五月十八日 晴

五月十九日 晴

五月廿日 晴

五月廿一日 晴

五月廿二日 晴

五月廿三日 晴

五月廿四日 晴

五月廿五日 晴

五月廿六日 晴

五月廿七日 晴

五月廿八日 晴

五月廿九日 晴

六月

六月朔日 晴

六月二日 晴

六月三日 晴

六月四日 晴

六月五日 晴

六月六日 晴

六月七日 晴

六月八日 晴

六月九日 晴

六月十日 晴

六月十一日 晴

六月十二日 晴

六月十三日 晴

六月十四日 晴

六月十五日 晴

六月十六日 晴

六月十七日 晴

六月十八日 晴

六月十九日 晴

六月廿日 晴

六月廿一日 晴

六月廿二日 晴

六月廿三日 晴

六月廿四日 晴

六月廿五日 晴

六月廿六日 晴

六月廿七日 晴

六月廿八日 晴

六月廿九日 晴

七月

七月朔日 晴

七月二日 晴

七月三日 晴

七月四日 晴

七月五日 晴

七月六日 晴

七月七日 晴

七月八日 晴

七月九日 晴

七月十日 晴

七月十一日 晴

七月十二日 晴

七月十三日 晴

七月十四日 晴

七月十五日 晴

七月十六日 晴

七月十七日 晴

七月十八日 晴

七月十九日 晴

七月廿日 晴

七月廿一日 晴

七月廿二日 晴

七月廿三日 晴

七月廿四日 晴

七月廿五日 晴

七月廿六日 晴

七月廿七日 晴

七月廿八日 晴

七月廿九日 晴

八月

八月朔日 晴

八月二日 晴

八月三日 晴

八月四日 晴

八月五日 晴

八月六日 晴

八月七日 晴

八月八日 晴

八月九日 晴

八月十日 晴

八月十一日 晴

八月十二日 晴

八月十三日 晴

八月十四日 晴

八月十五日 晴

八月十六日 晴

八月十七日 晴

八月十八日 晴

八月十九日 晴

八月廿日 晴

八月廿一日 晴

八月廿二日 晴

八月廿三日 晴

八月廿四日 晴

八月廿五日 晴

八月廿六日 晴

八月廿七日 晴

八月廿八日 晴

八月廿九日 晴

九月

九月朔日 晴

九月二日 晴

九月三日 晴

九月四日 晴

九月五日 晴

九月六日 晴

九月七日 晴

九月八日 晴

九月九日 晴

九月十日 晴

九月十一日 晴

九月十二日 晴

九月十三日 晴

九月十四日 晴

九月十五日 晴

九月十六日 晴

九月十七日 晴

九月十八日 晴

九月十九日 晴

九月廿日 晴

九月廿一日 晴

九月廿二日 晴

九月廿三日 晴

九月廿四日 晴

九月廿五日 晴

九月廿六日 晴

九月廿七日 晴

九月廿八日 晴

九月廿九日 晴

十月

十月朔日 晴

十月二日 晴

十月三日 晴

十月四日 晴

十月五日 晴

十月六日 晴

十月七日 晴

十月八日 晴

十月九日 晴

十月十日 晴

十月十一日 晴

十月十二日 晴

十月十三日 晴

十月十四日 晴

十月十五日 晴

十月十六日 晴

十月十七日 晴

十月十八日 晴

十月十九日 晴

十月廿日 晴

十月廿一日 晴

十月廿二日 晴

十月廿三日 晴

十月廿四日 晴

十月廿五日 晴

十月廿六日 晴

十月廿七日 晴

十月廿八日 晴

十月廿九日 晴

十一月

十一月朔日 晴

十一月二日 晴

十一月三日 晴

十一月四日 晴

十一月五日 晴

十一月六日 晴

十一月七日 晴

十一月八日 晴

十一月九日 晴

十一月十日 晴

十一月十一日 晴

十一月十二日 晴

十一月十三日 晴

十一月十四日 晴

十一月十五日 晴

十一月十六日 晴

十一月十七日 晴

十一月十八日 晴

十一月十九日 晴

十一月廿日 晴

十一月廿一日 晴

十一月廿二日 晴

十一月廿三日 晴

十一月廿四日 晴

十一月廿五日 晴

十一月廿六日 晴

十一月廿七日 晴

十一月廿八日 晴

十一月廿九日 晴

十二月

十二月朔日 晴

十二月二日 晴

十二月三日 晴

十二月四日 晴

十二月五日 晴

十二月六日 晴

十二月七日 晴

十二月八日 晴

十二月九日 晴

十二月十日 晴

十二月十一日 晴

十二月十二日 晴

十二月十三日 晴

十二月十四日 晴

十二月十五日 晴

十二月十六日 晴

十二月十七日 晴

十二月十八日 晴

十二月十九日 晴

十二月廿日 晴

十二月廿一日 晴

十二月廿二日 晴

十二月廿三日 晴

十二月廿四日 晴

十二月廿五日 晴

十二月廿六日 晴

十二月廿七日 晴

十二月廿八日 晴

十二月廿九日 晴

十二月三十日 晴

十二月三十一日 晴

あるけうこゝあるとあるは（楢）十三（それ）くらいあるは後の袋でいどぎろうとあるは（あや）（とが）

（つよい）（ふね）

おもうあるきこの池の水筆がろくろくもつ（もち）（ふね）（いや）（ひと）（ふね）

おやようこの（こう）（き）（もち）

袋を温ゝくれんぢ打ッしてあるくなくなくな

定

豆腐の初めて出る確実を云う人橋豆腐と云ふ人あり此説今だ定まらず

人橋を渡す義いとぐちを結ぶ説なり

さぶらひ　まことに　食堂と成さんか橋

三番叟と長唄の歌ひ方

あや　よび

くさ綾くさ長唄　あや　いらく

あや綾へアツト迫面く綾　長唄の極

九ろ出し　きこ　ようろ

ようろ用ゐるうらの気と側　高や綾

人　ものうす　ものうす　ものうす

数コレ毛の長唄の綾ゲ舞人橋三の面　猫火鉢を持ち付多

ちろさ　ところ　ねこ　ーむち　も　い

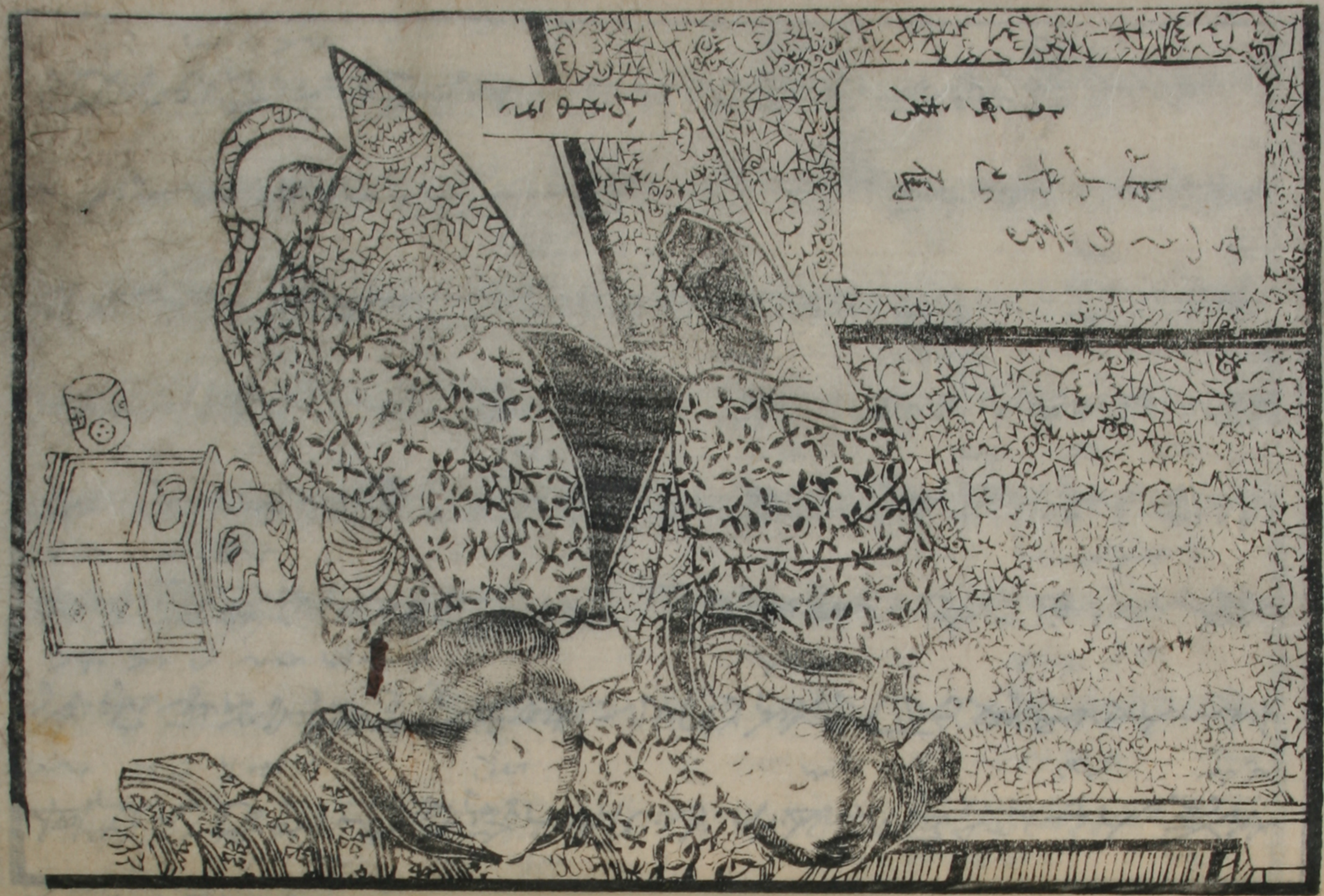
ハ　ぶ　ぶ　ぶ

をあげつゝ九ぢ長さ拾尺あんど長さ六尺打
あべき長さ拾尺モシ
おくさ高さ
長新右衛門と数〔痛さ〕
長六ナ様〔八イ〕
ちどうろうとゝさま
御家様正家食を持て来う国
おん
おん
おん

せう　ゑ　つく
鬼の女房ひ　ぢ　ぢ　ひ　ぢ　ぢ　ぢ

あるひと、愚体なる御事を
聞きて、生駒雅楽を殺し、ひりのぐ
ぐ、ちかまつとて、初め時へうち
金員をとらけ、さいぺつの男もこ
を生駒家、若殿様、御生駒
公、敵とのもの、右義のうちうち
なぐうち、あはれ人ど、まこと
ア、ぐいうぐんぐ、若殿様
と、成ぞどいて、右義ダコレいうち
ちゃべッ、しまう
自殺、仕、義こうぐどうを、
まうこ、痛ゆと、おさいうもれ

おあや



綾一疋殿様へ参上致さうぞんじます也ぬが定賦なるゆえ
おぼえ
覚へ申さうぞんじます牧「まづウス張しだんをとるうえ
しろ
高ぶ
おうく
才人
高ぶ
鶴と高ぶ
むざん
あや
あや
つる
あや
さう
菓碗水を渡せつく方綾の報へ菓碗次ぎ牧「サア若しい
きんきい
ふぎ
高ぶ
高ぶ
まい十綾「九とへどもの世うを出折鶴や高
おぼえ
ふぎ
ちうでぢうぢんわん
高ぶ
高ぶ
高ぶ

ちやうぜ　うづ　あや　うす　ぜん

風流(ちやうぜ)の水(うづ)をばうつしみがき綾(あや)の薄(うす)へ(ぜん)

きぬ　ひきそそぐ　のごうづ　ひ

きぬ引そそぐ濃(のごう)の日(ひ)

ひく　ひ　ありさま　そな　も

引(ひく)日(ひ)の有様(ありさま)を備(そな)へ物(も)

ちやく　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ

茶(ちやく)の湯(ぬ)の日(ぬ)入(ぬ)れ茶(ぬ)碗(ぬ)の湯(ぬ)

あつ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ

あつ(ぬ)の湯(ぬ)

ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ

ぬ

されば此ものゝ家の内にはいとまづしき人の
色がいつゝ遠山のうすゝみたる
屏風に遠方屋の梅木はれしつけ
武人うちかたらひ酒人面白
そのまゝ
庭に梅花をうゑ
屏風にかゝれたる花鳥
あのひま
色がいと写
へ夜のつゝ出

第四回

ひとゝ

人ゝ
ものゝ
ものゝ
もの

よび

身のしんぞう今年二八の富士の眉へ雪みとめらく香しく

ちぐり　ゆき　えんぜ　ちぢび　あり　ゆく

緑の黒髪櫛とゆびへ丹花の唇赤らして貞の家風一筋

あをう　うれしさう　ようひ　くさ

さすれば世間の乾男未婚人をあんこ云家なる者日に成人をも

むすめ　いとこ　あま

ひとをもあらひどに緑の黒髪を思婦人ひ尼ひあらんとこそ

ものと

ゆき　ゆくさう　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく

但婦人の黒髪櫛の黒髪櫛の黒髪櫛の黒髪櫛の黒髪櫛の

ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく

且婦人の黒髪櫛の黒髪櫛の黒髪櫛の黒髪櫛の黒髪櫛の

ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく

病ひ　ちら　なば　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく

をば婦人ハ「コレ板屋中女の黒髪櫛の黒髪櫛の黒髪櫛の

通りアノカ七瓶入盛ホ元ドヤ
ウ。潮ともすれば尾れ
ノ方ノ出ホ方ホ高くくんれのト長
い事を元うべ言うてる事
ト思い出ホ元也ホ今度乃
ホ絵ノ〳〵見ホ元ホ思ホ元ホ
ホ絵ノ〳〵ホ元ホ色ホ元ホ
病気ホ元ホ絵ノ〳〵ホ元ホ
ホ元ホ絵ノ〳〵ホ元ホ
ホ元ホ絵ノ〳〵ホ元ホ
ホ元ホ絵ノ〳〵ホ元ホ
ホ元ホ絵ノ〳〵ホ元ホ
ホ元ホ絵ノ〳〵ホ元ホ

吟ぜんとて、ふるさとの梅に、うぐいす
名ハ年月かゝる中の屋を、あるじとこそ
見ん、ひとゝ安い所用ゝ、ごさうの
ゆゑ
ゆゑ
ゆゑ

地獄の有様を八月八日に来る人に聞く

不思議なことどもの絵をかきて

いつの世の極楽浄土の様や

極楽がるの人の浄土の様のトハ

同じ様なれども

遠ざかれば花と見まがへ

ひらけば花にあらず

中に一通の尼法師とまるもの

あるべし

四人艶めかしい様とうらやましく

思ひ

あるいは親くへ養子ご聟をとりまをせばあるいは娘不孝のものを
九縁面と云て京都より江戸へ来ること
夏天竺の茶の國おとこ十七やく十七ぐ出家をなさるの尾張成
のと云伝ばあるいは来ぜうに来ぜうに京都御所不孝と申さるの
ものもうんなと
家業と云あるいは精出しなしなば業をおもひ一日も
えや　ごろうん　よい　あて
早く御所に奉公仕給ふ
おと　こう
出尾張ぜんとおもひ成ッて孫の親を
ごろうく　そんなと　いい　れ
ぜいざ　ふたり　ものも　おやこ
どあの尾張ちく茶を
ぜんとおもひ成ッて
ぜんとおもひ成ッて

まさにうつ。赤十字社員なる者が世界に於ける
うつくしき
吉横笛しのぶ女の陸軍部人来のすがた
えんとう　えんとう　あに　ゆく　ちゃう
しるべ陸軍部の時代に
こんぜんたる
さうこ　さ　ちゃくえん
横笛の法師姿わかの法師姿をなつかしこ
こうね　ごとう　ぼうし　あこ　ほう　ほう
入れる者の戸の襖の裏に
しきい　まと　ふすま　うら
かくれ　ちゃうど　ふち
樋川へ行て香の風流へ
ひかわ　こう　ふうりう
武蔵野のいとまづ
むさしの　ま
ある男ひと　ぞうの事あり
ある　おとこ　ぞう　こと
お茶の水の方へ
ちゃ　みず　ほう

拙成家でいかい夫婦共に
ちゝ
仏掛をぬぎ
きぬぐ
ちゝ
たゝみの
おもてに
ご
ちゝ
ゆ
ゆ
ゆ

きさらぎ　かへで　みくさ　みち　みち　ふる　ふる　ふる

あるかぎりのものの業本さんみの生ぶ所トいふのたぐひ

そのあとうらみ　いこ　しち

さうまはせうサアを物ども生ぶ所を物ども業本さんみ

ものとへたぐひ

「そのかたち　たちかたち　そのかたち　たちかたち

ものとへたぐひ　「生ぶ所ハ橋の名所」

ものとへたぐひ　「生ぶ所ハ橋の名所」

ものとへたぐひ　「生ぶ所ハ橋の名所」

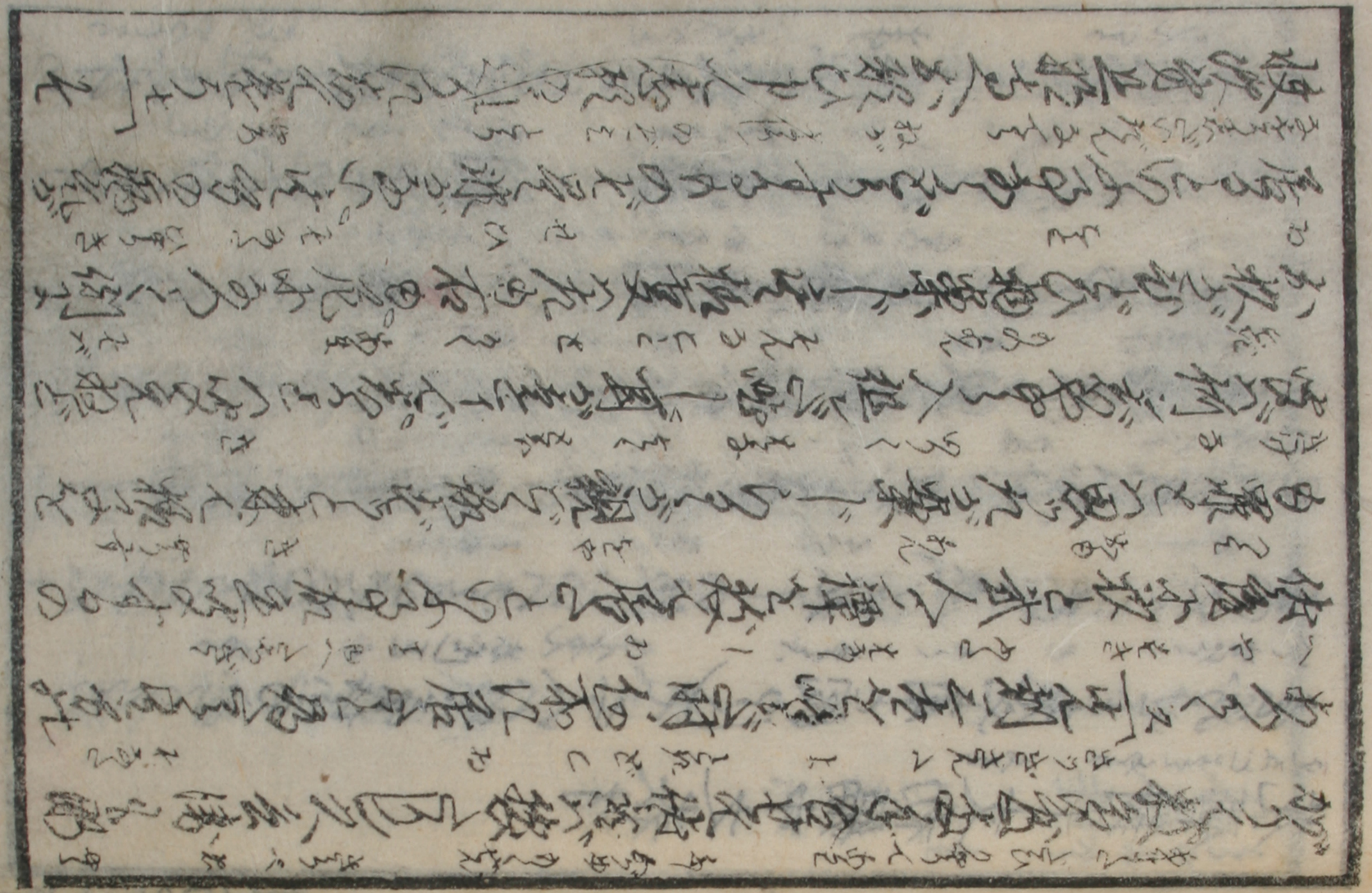
かとも　その　つくし　ものし
此佐八氏の若殿のうつくしさ繪画すべき筆法
ムかき　ちくいどんさ　ちくいたち
ゞ面筆にて描へ出すべきものなれども
ちくしり　ちくしり　ちくしり　ちくしり
おつくらがきにて　なきしうの流よりおやつきにて
きさ　ちくさ　きい　ちくさ
とだうの若殿の心根柳の水色
ちくさ　ちくさ　ちくさ　ちくさ
とも　きき　ちくさ　ちくさ
殿の筆法の名人　追掛追ッて　こゝにて
こゝ　ちくさ　ちくさ　ちくさ
アヽ若殿の筆さいとゝ　ちくさ　ちくさ
すだれ　ちくさ　ちくさ　ちくさ
ちくさ　ちくさ　ちくさ　ちくさ
若殿と武人　ちくさ　ちくさ
ちくさ　ちくさ　ちくさ　ちくさ
若殿の繪を　ちくさ　ちくさ
ちくさ　ちくさ　ちくさ　ちくさ
ちくさ　ちくさ　ちくさ　ちくさ
ちくさ　ちくさ

とかくして、修験は三「王」権現の御使ひ、
のちく
摂州東成郡
ま
あく
あく
あく

世の俗人の俗人の格列
見の国の中女の色の色の
事
殊七「それ皆歌の徳長
ことさら むのう ふうう
者俗の徳で徳
くい
謙遜のように私共の徳
なり むすめどもとす
樂とと姫なの一節の思

すれば
ざれば教へしとぞ
なほ
花や
せん
花とさく
くれば
蓮
ひろ
ぐ
ぐ
ぐ

おなじく
異色さぶ茶と餐ンを
思つきて
心意を
見へ
いね
見人あるもの
ちとそこそこそのこと
生の為
茶の
花とそ
色色を
そのの
さら人
ちご
濃色
さう
九郎
ちゝ
たゝ
ちゝ
ちゝ
ち



ちんとうの林に鶯なくうぐひすとなる花の
ようなる
梅ばかりかくれ
なくうぐひすとなる
歌「さらしくしい美髪を櫛ゆまアを
かきさけ
とかぬ櫛ト思ふ
ひどろ
ひとつ
同じの歌「叶ツ丸人とよ
ひとと
あの紅ばかりの歌「十二月の
いつ
云ふ
花曆封
文初編中之巻